

シリーズ『米国で活躍する日本人医師たち』

No.4

日米、世界の医学界で活躍し 米国日系社会に貢献

コロンビア大学循環器科
本間俊一教授



米国に根差して臨床、研究の第一線で活躍する日本人医師たちを紹介するシリーズの第4回では、大学での臨床・研究に加え、日米医療界の交流に力を注ぎ、また世界的にも活躍する医師をクローズアップする。

中学1年で渡米し、米国で教育を受ける

1967年、商社勤務の父の転勤で、中学1年の1学期終了後、大阪からニューヨーク(NY)へ。日本の優等生もいきなりの渡米に、「英語が全くわからずショックだったが、クラスメートが親切にしてくれた。慣れるまで約半年、本当に英語が理解できるようになるまで1年ぐらいかかったが、全員が初めて習うフランス語だけは最初からよくできた」と当時を振り返る本間氏。次第に他教科でも実力を発揮し、ブロンクスサイエンス高校に進学した。

NY市内全域の中学3年全員が数学と英語の筆記試験を受け、その成績順に定員までがブロンクスサイエンス高校に入学できる。通常、米国の公立校は地域内の学生は無試験で入学するが、同校は全米でも有名な公立の進学校で、卒業生のノーベル賞サイエンス部門受賞者数世界一を誇る。本間氏の同級生約1,000人の大半は白人、約2割のアジア系もほとんどが中国人で、日本人は2人だけだった。そのもう1人の日本人同級生とはいまだに交流がある。高校生活は勉強ばかりだったが、夏休みも選抜されて、ニューヨーク大学のコンピュータ・コースを勉強したり(1年)、病院の心臓内科で小児カテーテルの助手のアルバイトも経験した(2年)。高校3年では、ウエスティングハウス(現インテル)サイエンスタレントサーチコンテストに入賞した。同賞は1942年に始まった、米国で最古かつ権威ある高校生対象の科学賞で、ペビーノーベル賞とも言われる。子供のころから漠然と医師を希望していたが、高校で特に心臓に興味を抱き、医学志望が明確になった。

中学～高校と、平日は米国の学校に通い、土曜日は日本語補習校で日本の教科書を使って勉強した。授業や宿題はたいへんであったが、「約10人の日本人クラスメートと放課後遊ぶのが楽しかった」と本間氏。この学友の1人はのちに妻となった。補習校を無事卒業し、日本の高卒の資格も得た。

1973年、家族は皆日本へ帰国したが、NY近郊の全寮制のダートマス大学へ進学して生物学を専攻し、絵画への興味から美術史も学んだ。「森に囲まれた素晴らしい自然のなかでおおいに勉強しましたが、冬はスキーを満喫し、半年間フランスへ留学するなど、楽しい大学生活だった」と本間氏。

1977年、卒業と同時にNY市内のアルバートアインシュタイン医科大学に入学した。81年に卒業後、同大学のモンテフィオーレメディカルセンターにて内科研修。84年からハーバード大学(マサチューセッツ総合病院)にて、非侵襲性心臓イメージングの臨床および研究フェローとなった。「絵画の好きな自分には視覚的なイメージングが合っているのではないかと考えた」と本間氏。86年から2年間コロンビア大学にて循環器フェロー。助教授、准教授を経て2003年から教授。92年からエコー室長、2008年からはそのほかMRIなどを含む非侵襲性心臓イメージング部門の責任者。また、99年から医師だけでも170人を超える循環器部門全体の副部長も兼任している。

本間氏の専門は心疾患の超音波診断だが、なかでも心原性脳塞栓における心房・心室中核欠損症の診断を得意とする。そのほか、同大学バイオメディカルエンジニアリングと共同で、3次元エコーを用いた各種診断や治療の補助、高密度焦点式超音波(high-intensity focused ultrasound; HIFU)を用いた心房・心室細動のアブレーション治療など多彩な研究を行う。また、米国立衛生研究所(NIH)による、左室収縮障害を伴う患者に対するアスピリン・ワルファリンの比較臨床試験(WARCEF)の責任者として、世界200施設以上に及ぶ試験の指揮を取る。さらに、米国エコー学会の国際関係責任者として、中国をはじめとした医療の発展途上国への貢献など、米国にとどまらず世界的に活躍する。日本では、東京女子医科大学で客員教授として年に数回教鞭を取るほか、同大学とコロンビア大学メディカルスクールの交換留学制度の設立にも尽力した。また本間氏の研究室には、日本各地からポストドクトラルフェローが訪れて常時数人が研究を行っており、日米医学界の交流にも貢献している。



今年4月に行われた奨学金受賞者表彰パーティー。後列右から5人目が本間氏

米国日本人医師会と日系人社会への貢献

米国日本人医師会(Japanese Medical Society of America; JMSA)は、日米医学間の交流、地域医療サービス、医師紹介ネットワークを目的に、医師および他の医療従事者によって1973年、NYに設立された。本間氏は2005～08年に同会長となり、「小さな社交クラブからより実態のある医師会」を目指して変革を行った。まず、資金調達、財務、企業・政府関係、奨学金授与、地域医療、会員開発、コミュニケーションの各責任者として評議員のなかから担当副会長を任命して会の組織化を行い、各種活動の活発化を図った。また、NY日本商工会議所を訪ねて日系企業からの寄付を募り、より多くの資金を集めた。それにより奨学金およびその受賞者数が増加可能となり、さらに受賞者に単に奨学金の授与だけでなく、応募時の奨学金の使用目的の記述と1年後の成果報告を義務付けることで、日系社会の医療への奨学金の還元を図った。そのほか、JMSAはNY日系人会(JAA)と会員医師の協力で、無料の医療相談を行ったり、定期的な健康セミナーを開催したり、ニューズレターを発行するなど、日系社会の医療・健康に貢献している。また、JMSAからの寄付により、2008

年、NY市内の墓地にある野口英世博士の墓碑の修復を行った。これら日系社会に対する一連の活動が評価され、JMSAは同年に外務大臣賞を受賞した。このJMSAの活動を全米全体に広げたいと、本間氏は会長を退いた後も、なお評議員の1人としてJMSAの活動に貢献している。

本間氏はまた、NY日本国総領事館の当時の医務官(仲本光一氏)の協力を得て、NY周辺の医療系邦人支援グループ(NPO)同士の情報交換や相互支援を目的とした「邦人医療支援ネットワーク」Japanese Medical Support Network(ジャムズネット)を2006年に発足させ、現在も代表を務める。現在20余の参加団体は総領事館のホームページにも掲載され、会員団体相互の連携が活発化した。JMSAを通して日系企業から集められた寄付金はこれらの参加NPO団体の支援にも使用されるなど、官民が協力して日系社会に貢献する体制が構築された。この活動も今はNY近郊が中心だが、本間氏は「会員団体を徐々に全米に広げて、より大きなネットワークとし相互支援の輪もより大きく広げていきたい」と希望している。

適材適所で組織づくりをし、今後の発展促す

本間氏はこの40余年にわたる米国生活を振り返り、「何事も忍耐を持って努力することが重要」と語る。人を大事にして支援を惜しまない本間氏の周りには、多くの人が集まる。「1人の人間ができることには時間的にも限りがあるから、同じ目的に向かって多くの人が協力していける組織づくりを常に心がけている。自分やだれが欠けても目的に向かって発展できるような組織をつくることが重要。また、その組織づくりのなかで若い人も活躍の場を設け、次の世代のリーダーを育てていくことも楽しい」という。

美術への造詣が深い本間氏は、母校ダートマス大学の美術館の理事も務める。場所や領域を限らず数多くの舞台上で活躍し多忙を極める本間氏にストレス解消法を尋ねると、美術鑑賞かと思いきや、「日曜日の早朝、まだ妻が寝ている間にスキーに行き、お昼までには帰って来る」との回答。家庭では妻と一人娘を大事にし、外では多種の物事や人々と応対する日常だからこそ、たまに大自然のなか1人で風を切って滑降する時間が大切なのであろう。忍耐と努力、人への思いやりや調和を大事にする日本人の心と、米国流の合理性や公平なディスカッションによるコミュニケーション術など、両国のよい点の巧みな融合、優れたリーダーの根底にはそれが存在するように思われた。

(毎月第3週号に掲載)

—若い医師へのアドバイス—

患者の立場に立った医療を志して欲しい。自己満足ではなく、患者のための治療であることを念頭に置いて、患者を人間として全体を診て、また家族を見て、治療法を考えること。さらに、患者とのコミュニケーションを良好に保ち、治療の中心に患者を置くことが重要である。

—米国から日本の医療を考える—

日本からの学生や研究者を見て気付くのは、自分から意見をあまり発言しないこと。昔からの習慣・風土だろうが、日本の医学教育や医療現場のなかに、上から下への一方的な情報伝達ではなく、いろいろな立場の人がオープンにディスカッションできる場を設け、各自が意見やアイデアを自由に発言し合う習慣をつくっていくとよいのではないかと。